

## 矢作三藏先生のこと

奥村 直史

矢作先生と初めてお会いしたのは、15年近くまえのことであった。当時、矢作先生は非常勤講師として学習院にいらしていたのだが、他大学の学部から学習院の大学院に入ったわたしは、矢作先生のお名前しか存じ上げていなかった。ある日、武田千枝子先生からお話があり、武田先生の研究室で矢作先生と話す機会をいただいた。無論、武田先生も一緒である。研究室にうかがうまえは、いったいどのようなことになるのかと、多少の不安があった。『アメリカ・ルネッサンスのペシミズム』の著者であるとの知識しか、わたしは持ち合わせていなかった。実際お会いしてみると、気さく、且つ情熱的な先生であった。ある所に載ったわたしの論文を読んでくださり、後輩を激励する趣旨で声をかけていただいたのであった。先輩などとの繋がりを持つにいたらない環境にいたわたしは、驚くとともに、学習院はすごいと感じた。

矢作先生と身近に接するようになったのは、わたしが英米文学科の助手になってからである。矢作先生はそれよりまえに山梨大学から学習院に移られていた。助手の話は、当時

主任であった今井邦彦先生からの突然の電話で知ることとなり、わたしは大変驚いたのだが、矢作先生が助手をお勤めになっけいらい、数十年のブランクがあつての職だと聞き、さらに驚いた。あとから聞いた話であるが、この助手のポストに矢作先生が強くわたしを推して下さつたのであつた。後日そのお礼を申し上げると、「そういうものだ」との、すぐくあつさりしたお言葉が返つてきた。このさり気なさが、矢作先生の美学であつたと思ふ。

矢作先生曰く「助手は大変だよ」とのこと、ここに書き記すには憚られるようなことが矢作先生の助手時代にはたくさんあり、ご苦勞されたのだつた。そのような体験から、助手がどのような場面で窮地に陥るかをご存知の矢作先生は、影に日向にわたしを支えて下さつた。それとは対照的に、ご家族のことを話されるときには満面の笑みを浮かべられ、特に奥様のことを話されるときにはそうだつた。矢作先生には、外でお酒を飲む席にたびたびお付き合いいただいたが、何よりも家で飲むお酒が一番だとおっしゃられた。前の日に作ったカレーで、冷えたジャガイモをつまみに飲むのがうまいんだよ、と話されたときには、家庭人としての幸せがあふれ出ているご様子だつた。

矢作先生は、ご家族に対する愛情と等しいものを学生にも分け与えておられた。ホーソーやメルヴィルなど、アメリカ・ルネッサンスの作家を卒業論文で扱おうとするゼミ学生の多くは、まさに信奉するという言葉がふさわしいほど矢作先生に師事した。一昔前ならいざ知らず、昨今の大学でこのような関係が生まれる例をわたしは他に知らない。文学研究だけでなく、リスニング研究会を催され、「本物の英語」を志ある学生に伝授された。熱意を惜しむことのない先生であつた。感謝とともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(山梨大学 准教授)